

連載

## NIA 吉村会長の Coffee Break

国連職員として世界中を旅してきた吉村和就会長が、日本人の知らない海外事情をウィットとユーモアを交えて綴るコラムです。

## 第5回 イラン・イスラム共和国と日本 その1

イラン・イスラム共和国は、中東でサウジアラビアに次ぐ2番目の大きな国で、国土の9割以上が乾燥地帯(砂漠)であり、人口8920万人(2023年)、年間降雨量は50ミリ程度で、石油は売るほど有っても水資源がない国です。

私は2015年11月、UNESCO(国連教育科学文化機関)とイラン政府共催の「水会議」に招かれ、首都テヘランで講演をしました。(英語からペルシャ語へ同時通訳付き)

その内容は東日本大震災からの復興、福島第一原発事故と汚染水対策、水教育とマスコミの関係などでした。中でも聴衆が最も興味を示したのは「日本とペルシャの歴史的な繋がりに」でした。(1935年にペルシャからイランへ国名変更)

皆さんも歴史の授業で習ったと思いますが、古来ユーラシア大陸を横断する交易路「シルクロード」を通じペルシャから多くの工芸品が日本に伝来しました。その一部は正倉院(奈良時代756年)に収蔵されており、ペルシャン・グラス(瑠璃杯)、水差し、ペルシャ絨毯などが知られています。

さて、近年で「歴史的な繋がりに」で大きかつ



国連 UNESCO-イラン政府共催 Water&Media で招待講演



2015年11月16-17日 テヘラン市  
コンベンションセンター 大ホール

エネルギー省副大臣

GWJ 吉村代表

た出来事は「日章丸事件」です。

1951年にイランは石油資源の国有化を宣言しました。しかし当時世界の石油利権を独占していた石油メジャーがそれに激怒しました。特に英国は中東に軍艦を派遣して、「イランに石油を買い付けに来たタンカーはすべて撃沈する」と国際社会に表明したのです。

当時イランは欧米の経済封鎖で食料も不足し、国民が貧窮していました。その時、出光興産の出光佐三社長はイランに対する「経済封鎖は国際法上の正当性はない」と判断して、イラン国民の窮状を救うことにしました。また敗戦国・日本も連合国の制裁により、石油の輸入を自由に出来ないことが経済発展の足かせとなっていました。そこで出光社長は両方を解決すべく独自のルートで石油資源の確保を決断したのです。それは極秘裏に神戸港から「日章丸・タンカー」をイランに向かわせてアーバーダン港で石油を購入。帰路は布設された機雷を避け、さらにイギリス海軍の裏をかいて日本へ運ぶというものでした。日章丸は川崎港に無事着岸しました。

この出来事は「武装をしていない民間企業が、世界第二の海軍力をもつイギリス海軍に喧嘩を売った」事件として世界中に報道されました。この勇気ある日本の行動をイランの

人々はその後も忘れていなかったのです。「困ったときの友人は真の友である」と。それ以後、世界的に石油の自由貿易が始まりイランの石油輸出は増え続け、今や輸出総額の8割を占めるまでになりました。イランに親日家

が多い理由の一つです。(次号に続く)

\*日章丸事件、さらに興味ある方はネット検索をご覧ください。

(吉村和就／習志野市国際交流協会会長、国連テクニカルアドバイザー)